

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前 11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

ちゅうしょうかい が ある「抽象絵画」との 出会い

立科町教育相談員 岩上起美男

春三月は、児童・生徒にとって、卒業や進学、就職、クラス替え、先生方の転任など、「分かれ道」(分かれ道)に立ち、自分の道を歩み出す時であり、また、出会った人は必ず別れるという「会者定離」の時です。

この大切な節目に、児童・生徒が「分かれ」と「会者定離」にきちんと向き合い、心の中によりしっかりと「命の根」を張ることを願っています。



平成26年度末は、老生にとって、教育相談員として6度目の「分かれ」の場、「会者定離」の時となりました。塩澤勝巳教育長より、立科町教育相談員に任命するという「任命書」を拝受してから、早6年の歳月が流れました。

歲月人を待たず、と申しますが、過ぎ去った時間は本当に速く、当時の、立科町における教育相談という新しい任務に対する緊張と不安が、つい昨日のことのようによみがえってきます。

と同時に、6年という歳月の重みしみじみと実感します。人の感情とは不思議なもので、同じ時間でありながら、一方で矢の如しと感じ、一方で、正確に、規則正しく「時」を刻んでいるのを感じているのです。人の心の中は、一つの体

験に対して、常に、単一の感情が湧き起こるのではなく、相反する様々な感情が混じり合うことなく去来しているのだと思われれます。

日々、力不足を痛感しながらの6年間でした。若い世代に伝えるべきことを伝えようという思いと、「何を偉そうなことを……。言わずもがなのお節介りというものだ。ぞぜえるな。」という自責の思いが激しくぶつかり合う6年間でした。

そして、まことに有難いことですが、胸中に在る感情が決して単一ではないように、多くの方の「直き心」に触れ、自分なりに、自分らしく頑張ろうという元氣と励ましを分け与えていただいた6年間でした。

今年度も、嬉しい出会いと感動的な出来事が何度もありました。

立科小学校と立科中学校に、時折、足を止めて見入る抽象絵画(アブストラクト・アート)が掲げられてあります。

「ノストラダムスの幻影がある自画像」
(立科小学校管理棟一階廊下)
「私の顔の中のカーニバル」
(立科中学校東階段)

描いた方の創造力や心的エネルギーの

凄さがひしひしと伝わってくるのを感じますが、絵の素養のない老生は、抽象絵画の主題とか、表現意図とか、芸術的な価値とかをほとんど理解できません。抽象絵画をどのように鑑賞したらよいのか、分からないのです。

ある小説家が、講演で、半分真顔で、半分はいたずらっぽく、「私たちの日常には、言葉にできないもの、言葉にならないものがあふれている。それを言葉で分かり易く表現するのが小説家の仕事だ。したがって、小説家は、言葉にならないものを色彩や線、音などで表現する画家及び音楽家よりも不利な立場に立っている。」と述べていました。

この二つの抽象絵画を拝見するたびに、不可思議な感動が静かに湧き上がり、確かに、人の心の中に溢れるようにうねっている、言葉にならない具象以前の混沌とした「何か」は、色彩や線、音の世界なのではないか、と感じさせます。

この二作品の作者、片桐アキラ氏(虎御前)と、氏の長女の方が折々に立科町児童館の厚生員としてお勤めされている縁によって、昨秋、直接お話をうかがうことができ、大きな励みと嬉しい刺激をいただきました。

片桐アキラ氏は、昭和2年、中華民国(旧満州国新京)で生まれ、終戦後、日